おはなし散歩道

てんぐのなさけ

八王子市 池田 美絵

「えい！」

かずみは、力強く地面をけった。だが、何度やっても、両足は空を切るだけだ。

明日、逆上がりのテストがあるので、放課後の校庭で鉄棒の練習をしていたのだが、とうていできそうになかった。真っ赤になってきた手のひらを見て、あきらめの気持ちがわく。

「いいや、逆上がりなんてできなくても」

かずみはもう家に帰ろうと思った。そのときだった。校庭に突風が起こり、砂が巻き上がったので、かずみは思わず、顔を手でおおった。そういえば、台風が近づいているとテレビで言っていた。そのときだ。

「痛っ！」

なにやらかずみの頭に固い物が当たった。

「もう、ついてなーい」

風がおさまったので、かずみは目を開けた。すると、足もとに大きなうちわが落ちていた。カエデの葉を大きくしたような形だ。

「これって、てんぐのうちわじゃない？」

いつかお母さんから聞いたことがあった。これさえあれば、奇跡が起こせると。かずみは、うちわを手にとり、しばらくながめていた。

「おう、わしのうちわは、ここにあったか」

ふいに、うしろのほうから低い声がしたので、かずみが振り返ると、赤ら顔で大きな鼻をした男が立っている。

「ひえっ、て、て、てんぐ」

かずみは驚いて後ずさった。

「すまん、すまん。さて、うちわ返しておくれ」

その言葉を聞いて、かずみはいたずらっぽい考えが浮かんだ。

「てんぐさん。明日、逆上がりできるようにしてください」

「うーん。うちわを拾ってくれた恩もあるし、この高い木の上から念を送ってしんぜよう」

「てんぐさん、ありがとう」

かずみは、うれしくなってスキップで家に帰った。

そしてよく朝、鉄棒のところへ行くと、てんぐが木のしげみにかくれているのが見えた。かずみはウインクをして、「よろしく」と、合図した。

一時間目、体育がはじまると、さっそくかずみの番が来た。鉄棒につかまると、力づよく地面をけった。すると見事に体が回転し、鉄棒の上でぴたっと止まった。

「できた！」

かずみは、てんぐの念力に驚いた。以降、何の苦もなく逆上がりができるのである。

すると、かずみにさらなる考えが浮かんだ。体育の授業が終わったとき、クラスメートが教室に戻るのを見届けて、木のしげみにかくれていた、てんぐに声をかけた。

「来週は、跳び箱のテストがあるの。私に、そのうちわを貸してください」

「よほど気にいったようだな。わしはもう山に帰るが、特別にうちわを置いていこう」

「ありがとうございます」

かずみは礼を言うと、体操着の下に、うちわをかくして教室に戻り、誰にも見られないようにかばんにしまった。

そして一週間後、かずみはかばんを開けて驚いた。きのうまであったうちわが、ただのカエデの葉っぱに変わっているではないか。

「てんぐさんのいじわる！」

かずみは、じたんだをふんでくやしがった。「こんな葉っぱ、いらない」と、捨てようとしたとき、葉っぱの裏に何か書いてあるのに気がついた。

「自分を信ぜよ」

かずみはギャフンといわせられた。他を頼らず、自ら不得意なことを乗り越えることが大切だと、てんぐは教えてくれたのである。

（さし絵・小出 茂）

高尾山報助成金志納者御芳名

八王子市 瀬沼 和重
〃 増山 進
〃 小池 まり子
熊谷市 小林 ハツ
東村山市 小川 芳男
国分寺市 島田 かほる
延岡市 山中 林
八王子市 石田 博司
〃 佐藤 光
〃 徳田 宏晴
日野市 中西 正夫
大田区 年野 治文
北区 遠藤 英子
八千代市 稲越 眞
中央区 岩野 鐵夫
三鷹市 中西 小夜子
八王子市 山本 千枝子
邑楽郡 八山 光三郎
足立区 千住一神講
所沢市 野村 綱二
富田市 茂原 登
八王子市 ㈲アズマ写真店
日野市 岡田 志美子
世田谷区 古藤田 龍平
〃 坂本 ルイ子
八王子市 奥田 雅重
太田市 佐藤 辰利
世田谷区 若林 成和
町田市 黒澤 利三
八王子市 中田 武彦
〃 中島 久江
〃 串田 展子
秩父市 板橋区 伊藤 マサ
相模原市 安西 貞吉
八王子市 樫崎 彰男
〃 岸 ヨシ
〃 高根澤 武
武蔵村山市 汐月 昇
日野市 野村 尹子
加須市 塩崎 君子
本庄市 福島 参拝団
川越市 川越福善講
久喜市 本多 愛子
八王子市 小池 まり子
あきる野市 南波 和子
伊東市 大江 弘
深谷市 三宅 ふじ
川越市 野村 實
さいたま市 関根 元二
八王子市 山城 國夫
〃 倉石 芳和
〃 松木 艶子
〃 清水 榮三
〃 遠藤 実
〃 井上 潔
〃 徳田 宏晴
〃 遠藤 保男
狭山市 富田 衛
高崎市 大澤 登
朝霞市 高橋 常吉
〃 織田 秋子
伊勢原市 佐々木 晋介
新宿区 加藤 貴仕子
太田市 横島 守
前原 啓作
伊藤 マサ
安西 貞吉
樫崎 彰男
ヨシ
武
昇
尹子
君子
拝団
善講
愛子
まり子
和子
弘
ふじ
實
元二
國夫
芳和
艶子
榮三
実
潔
晴
保男
衛
登
常吉
秋子
晋介
貴仕子
守
津山市 三浦 光久
いわき市 新藤 孝弘
岩見沢市 俵谷 一子
江東区 金子 豊親
世田谷区 茂木 荘資
杉並区 田巻 博士
練馬区 小出 みつ
小平市 吉田 悦夫
八王子市 渡邊 マサ子
〃 吉原 清志
〃 佐藤 文一
横浜市 上倉 和子
相模原市 古屋 浩之
多摩市 小泉 富保
船橋市 高野 さき子
太田市 大塚 久江
〃 石井 光雄
南巨摩郡 庄司 英夫
酒田市 前田 秀雄
世田谷区 吉田 和
八王子市 町田 雪江
〃 上岡 秋子
川口市 八木橋 弘子
相模原市 ㈲北田油店
所沢市 鈴木 宗夫
荒川区 落合 謙一
八王子市 吉田 功
伊勢崎市 吉田 澄枝
長崎市 笹本 イヅミ
杉並区 島村 文子
川越市 柿沼 慶子
比企郡 寶蓮寺
栃木市
（順不同・敬称略）

高尾山の昆虫

ヤマトタマムシ

25

タマムシと聞いて一般的に思い浮かべるのは、ヤマトタマムシだと思います。名前の由来は、その美しい色彩を翡翠（ひすい）、宝石（玉）に例え、日本全土に分布するこの大型の美麗種に日本を代表するタマムシとして、ヤマトタマムシと命名したようです。

低山地の雑木林等で見られますが、サクラの木の周辺で目にしたりする身近な昆虫です。強い金属光沢を持つ緑を基調に、赤い縦縞が入りそれが光により虹色のような美しい輝きを見せ、昔から吉丁虫として愛され珍重されています。オスは天気のいい日にエノキの梢を飛び回り、キラキラ輝く様は実に壮観です。これだけ派手で目立つ存在だと、天敵である鳥からの襲撃に遭いそうに思いますが、この強い金属光沢が鳥には苦手のようで身を守るのにとても役立っているようです。

エノキだけでなく、ケヤキやクヌギの樹上で見い出されたり、前述のようにサクラの周辺でも多く見つかり、広葉樹に集まる習性があります。

高尾山では盛夏の晴天の日の昼下がりに、エノキの梢を乱舞する多数のヤマトタマムシが見られます。飛翔しているのはすべてオスのようで、付近の薪には次々と産卵のために飛来する多数のメスが観察できます。

有名な法隆寺の「玉虫厨子」には五千匹のヤマトタマムシが使われていると言われていて、タマムシと人との関わり合いの深さを感じます。

昔からタマムシを箪笥（たんす）に入れておくと着物が増えるという言い伝えもあり、時空を超えて美しくロマンを感じさせる昆虫ですね。

（撮影・文 松島 孝）